認定NPO法人四つ葉のクローバーと支援者を結ぶ小冊子

四つ葉通信

vol.14

絵：太田利三

◎四葉インタビュー／第13回：木村大輝さん

2人の里親さんのおかげで、ここまで成長できました。

困難を抱えた若者の自立を支援するスポット

Mother Board

マザーボードは、さまざまな生きづらさを抱える若者に対し、地域の専門機関が連携してサポートすることをめざした滋賀県地域養護推進協議会の拠点。2名の相談支援コーディネーターが常駐して個別の相談支援を実施する他、対象となる若者たちの居場所づくりを推進していきます。関心のある方は、いつでも気軽に遊びに来てください。スタッフ一同、心よりお待ちしています。

[オープン時間]
月～金曜日 9:00～17:00

※相談等の利用は、無料です。(訪問等の業務により、留守にしていることもありますのでご了承ください)

滋賀県地域養護推進協議会

〒524-0022
守山市守山6-10-68
マザーボード内
TEL:077-582-2221
FAX:077-582-2330

▲マザーボードの外観

▼相談に応じてくれるスタッフたち（非常勤含む）

▼勉強もできるくつろぎスペース

「四つ葉みらい基金」ご支援のお願い

進学や資格・免許の取得など、「子どもたちの未来」を応援していただけませんか？　WEBサイトからお申込みできます。
(QRコードを読み込むと、支援サイトに繋がります)

WAM助成　独立行政法人福祉医療機構　社会福祉振興助成事業

この冊子は、WAMの助成金受けて作成しました。

発行：認定NPO法人四つ葉のクローバー　代表・杉山真智子　滋賀県守山市守山2-15-25 夢コート

施設長就任のご挨拶

認定 NPO 法人四つ葉のクローバー
夢コート 施設長　森本美絵

この3月、京都橘大学を定年退職し、四つ葉の夢コート（自立援助ホーム）の施設長をお引き受けすることになりました。大学在職中は、研究の1つとして、児童福祉施設や里親等家庭で生活する子どもたちの権利擁護体制の構築を目指していました。

四つ葉の理事長である杉山さんとの出会いは、滋賀県里親連合会ファミリーホーム専門部会の場でしたが、個人的にお話をしたのは、長くお付き合いのあった児童養護施設守山学園の西崎施設長の葬儀の場であったと記憶しています。今回の施設長就任は、故西崎さんが私に、青年たちのリアルな苦悩・葛藤や願い・期待を知るようにと社会的養護実践に携わる機会を作ってくださったのだと感じています。

四つ葉の青年たちは、夢コート（援助ホーム）で支援スタッフとの共同生活から始め、自立度に応じて賃貸契約のステップハウスで定期のスタッフ支援を受けて一人暮しを体験し、社会に出ていくという自立のステップを踏んでいきます。もう一押し必要な青年には、引き続きサテライトハウスも用意しています。また、退所後もアフターケアに力を入れ、戻ってこられる実家のような居場所であり続けたいと思っています。しかし、地域で暮らす青年の日常の自立を支えるには、四つ葉だけの力では全く不十分です。地域社会の青年たちへの温かい関心と理解が不可欠です。これからも地域の皆様の彼らへの支援を宜しくお願い申し上げます。

【四つ葉 NEWS】

◎滋賀県では、2021年4月から滋賀県地域養護推進協議会という画期的な事業がスタートしました。児童養護施設等を退所した後も、まだ社会的自立支援が必要な人たちを対象として、各専門機関が共働して支援することにより、地域社会における若者たちの自立を促していくのが狙いです。当法人理事長の杉山が同推進協議会の幹事をしている関係で、四つ葉のクローバーではこの事業にも積極的に関わっています。スペースは、守山6丁目にあるビルを平和堂財団様の助成によって改装し、「マザーボード」と名付けました。1階は若者のセミナーや勉強会などの会議用スペースとして開放され、2階では若者食堂を定期開催していきます。「心の奥に人間不信を抱えた若者たちには、ありのままの自分を受け入れて肯定してくれる大人に出会ってほしい」と願わずにいられません。

協議会は、支援者たちのサポート組織という一面もあります。支援者がネットワークを組み、大人たちも安心して仕事が出来る環境づくりも求められています。詳しくは、本冊子の裏面を参照ください。いつでもスタッフが、皆さんをお待ちしています。

2人の里親さんのおかげで なんとかここまで成長できました。

木村大輝さん（20歳）

幼い頃から両親の喧嘩が絶えない家庭に育った木村さんは、学校の仲介によって一時保護所預かりとなり、そのまま里親に預けられることに。その後何度か自宅に戻ったものの、父親の素行が治らないため、高校を卒業するまで里親に育てられています。四つ葉のクローバーを経て、いよいよ今年の夏から憧れの自立生活をスタートさせた木村さんの意気込みについてお話を伺いました。

ぼくが里親へ預けられるようになった理由

小さい頃から両親の喧嘩が絶えない環境で育ってきました。記憶にあるのは9歳の頃ですが、それ以前からずっと続いていたような気もします。ぼくの妹は6歳年下なので、当時は3歳くらいでした。喧嘩が始まると怖くなって妹と布団の中に逃げ込み、寝たふりをしていました。喧嘩の理由は些細なものだったんです。母が家事をしないとか、料理がまずいとか……。お酒を飲んだ勢いもあり、2人で大きな声を出して殴り合うことが日常茶飯事でした。

このままじゃダメだと母親が学校の先生に相談したことがきっかけで、一時保護所に何度かお世話になっています。短いと1週間くらい、長いときで3ヶ月くらいでしょうか。いったんは自宅に戻って父親もおとなしくなるのだけど、時間が経つとまたもとに戻ります。そんなわけで一時保護所と里親さん（一時保護）と自宅を何度も行き来する生活を小学校卒業まで続けていたのです。

2人の里親の元での生活が、自分にとって貴重な経験

中学に入ってからは、別の里親さんのところにお世話になりました。今度は一時保護ではなく、18歳までずっとです。最初は妹と2人で生活するはずだったのだけど、移ってから最初の親との面会で、妹は家に戻ることを希望しました。まだ小学校1年生だったから、お母さんと暮らしたかったんだと思います。

でも僕は、迷うことなく里親さんでの生活を選びましたね。まわりに友だちもできていたし、家に戻るとまた怖いことが起きるというトラウマがあったんです。自分はもうやりたいことができたから、自分の道を選びたいという意志を伝えました。

里親さんには本当にお世話になりました。「お父さん、お母さん」とはなかなか呼べなかったけど、いつも優しく接してくれて、よく外食にも連れて行ってくれました。サッカー部に入って、充実した毎日が送れたのも、里親さんのおかげです。実の親のもとで生活していたら、とてもこんな楽しい学生生活は送れなかっただろうと思いますよ。

コロナ禍における四つ葉のクローバーの生活

里親からは18歳になったら卒業しないといけないルールなので、次に見つけたのが四つ葉のクローバー。自立援助ホームというひとり暮らしに限りなく近い環境が、とても魅力的だと飛びつきました。

入ってみたら、趣味の合う同年代の仲間がいたこともあって、とても快適でした。一緒にご飯を食べに行ったり、ゲームをしたり……。ただ僕が四つ葉に入ったのは、2020年の4月から。新型コロナウイルスの感染拡大が始まり、1ヶ月後には緊急事態宣言が発令されました。だから四つ葉の中でも、共用スペースではマスクを付けなければいけなかったし、飛沫防止のためアクリル板が設置され、アルコール消毒の徹底も義務化されていました。

個室に住んでいるとはいっても、集団生活です。みんなが集まる食事会や真夜中会議も定期的にあるので、感染予防には気を使いますよね。幸いなことに、四つ葉の利用者からは新型コロナ感染者が1人も出ていないので、本当に良かったと思います。

若い人が無症状の保菌者となって、感染者を増やすケースが多いという話をニュースでもよく聞きますから、自覚を持って行動しないといけないな…という気持ちにはなりますね。せっかく四つ葉に入ったのに、仲間たちと羽目を外したバカ騒ぎが、コロナ感染を気にしてほとんどできなかったのが少し残念だけど（笑）。

やっと正社員の仕事が見つかり、自立生活もスタート！

高校卒業後、ホテルに1度就職したのだけど、3ヶ月くらいで退職してしまいました。人間関係のつまずきではなくて、単純に仕事があわなかったからですね。僕の場合、人と話すのは問題なくできるし、むしろ得意分野なんです。だからフロントの仕事は向いていると思ったのだけど、担当業務のほとんどがパソコン操作でした。スマホは得意なんだけど、キーボードを操るのは苦手なんです。

本当はスポーツが好きだから、スポーツジムのインストラクターにとても興味があるのだけど、新型コロナのおかげでジム業界の業績は散々です。（ジムで働いている）友人からの情報によると、今は職員どころかアルバイトさえも募集していないとのこと。

なんとか四つ葉の卒業（大学生以外は原則20歳までに退所するルール）までには、ちゃんとした仕事を決めなくちゃと焦っていたところ、やっと某企業に正社員として8月から就職が決定しました。下水管の中に塩化ビニールの加工実験をする会社です。

四つ葉を離れて自立生活を始めたので、落ち着いたら2人の里親さんにはちゃんと報告して感謝の気持ちを伝えたいと思っているんです。僕がここまで育ったのは、なんといっても2人の里親さんのおかげですから。

（聞き書き：戸原一男）